

では、誰が食を作るの？

農からのソーシャルイノベーション。

株式会社エムスクエア・ラボ 代表取締役社長 加藤百合子

学生時代からロボティクスなどに関心があつたのですか？

弥生キャンパス時代は雑草を焼き切るヘクスロボットを作っていました。ロンドンのクランフィールド大学に留学したときもスプリングローボットを手掛けました。そこで担当教授に「人工植物工場をやりたい」と言ったら、「NASAでそういうプロジェクトをやっているよ」と勧められ、10ヶ月で急いでマスターをとってアメリカに渡ったんです。そのプロジェクトは半年ほどで切り上げ、帰国してキャノンに入社しました。それから結婚をして親族の産業機械メーカーに移り、研究開発部門を指揮しました。

農学というよりも工学という感じですね？

エムスクエア・ラボを立ち上げたときも、フィールドは農業ですが、業務の8割方は工業系の仕事でしたね。でも、農家の方々と関わっているうち「農業って、製造業なんだ」って気づいたんです。そう思ったら、それまで離れた存在だった農業が、自分のしてきたこととパチンとつながった。それで、なにかできそうだなと思ったんです。

ビジネスフィロソフィのようなものはありますか？

誰かを叩きのめして陣地を広げていくというのもやり方なんですが、わたしはそれはいやですね。自分だからできること、社会に対してなにか役に立てることを、いつも探しています。一度、子宮外妊娠で死にかけたことがあるんです。そのときから「母親として」とか、「生きているからこそ」ということを強く思うようになりました。

エンジニアとして稼げる自信はあるし、企業ではそれなりに成果も出しました。でもいまは、子どもたちやその次の子どもたちが持続的に幸せに暮らしていけるような仕事をしたいと思っています。ちっちゃい力かもしれないけれど、ママが働いたことで少し世の中の役に立ちました、と言われるようにがんばりたいです。

農学を学ぶ学生に何を期待しますか？

なにかひとつ自分のアイデンティティになるような技術とか知識を身につけて、それをいろんな分野で二つ、三つと増やしてほしいですね。そして、常に社会的な視点を持ち続けてほしい。そうすることで思考が鍛えられ、イノベーションを起こす力が生まれます。



いま日本は、超少子化や高齢化など、世界中どこを見ても解決法がない問題に直面しています。ここではなにもしないことの方がリスクです。農業でも、後継者問題や放棄地の問題がある。「では、誰が食を作るの？」と問いかけると、「作れないなら輸入すればいい」というような答えが返ってきます。大企業もソリューションを持っていない。だからこそ既存概念に捉われない若い人の生み出すイノベーションが必要なんです。

いま一番面白いと思っていることは？

子どもたちを対象にしたアグリーツという経営者育成プログラムをやっています。始めてまだ一年ですけど、手応えがあります。ただ土に触れ、農産物を生産し、商品に仕立てて販売するというシンプルな農業経営活動なのですが、モジモジして自分の夢を語れなかった子どもたちが、いつのまにか夢を持ち、それを実現するにはどうすればいいのか喋れるようになります。

昔からわたしは農学にはものすごい教育効果があると思っていますよ。自然と対峙し、世代間のコミュニケーションもとらなければいけない。基礎科学や人文学系の知識も必要です。これほどバランスよく一般的素養を一気に学べるものはありません。その意味で、これからは農学を学んだ人がリーダーになる時代なのではないでしょうか。だから農学部にはもっと気概を持ってがんばってほしいですね。

info@m2-labo.jp www.facebook.com/M2labo

PROFILE

加藤百合子 Yuriko Kato 東京大学農学部1998年卒。英国クランフィールド大学で修士号取得。直後に米航空宇宙局(NASA)の宇宙植物工場プロジェクトに参画。2000年に帰国しキャノン入社。2001年、結婚し退社、静岡に移住。産業用機械の研究開発に従事。2009年エムスクエア・ラボを設立。2012年青果流通を変える「ベジプロバイダー事業」で日本政策投資銀行第1回女性新ビジネスプランコンペティション大賞受賞。

詳しくは、株式会社エムスクエア・ラボ
<https://www.m2-labo.jp/>